様式 C-19

科学研究費補助金研究成果報告書

平成　21　年　5　月　29　日現在

研究種目：基盤研究（C）
研究期間：2006～2008
課題番号：18520012
研究課題名（和文）　クリティカル・シンキングの教育：方法と実践

研究課題名（英文）　Critical Thinking Education: Method and Practice

研究代表者
望月　太郎（MOCHIZUKI　TARO）
大阪大学・大学教育実践センター・教授
研究者番号：50239571

研究成果の概要：
１）クリティカル・シンキング（CT）の教育に関して、英語圏のみならず、フランス語圏（フランス及びカナダ、ケベック州）においても実地に調査研究を行い、さまざまな方法論を学び、またその実践を体験することができた。
２）議論分析と評価を専らとしたアングロサクソンモデルの CT を乗り越えるために、対話的批判的思考（Dialogical Critical Thinking (Marie-France Daniel)）、問いの技法（The Art of Questioning (Oscar Brenifier)）、子供のための哲学（Philosophy for Children, P4C (Richard Anthone)）、哲学カウンセリング（ Philosophical Counseling (Peter Harteloh) ）などの手法を取り入れた、新しい総合的な CT 理論のあり方を探り、それを応用した CT 教育を試行的に実施した。
３）アジアの教育風土に適応した CT を模索するために、日本-アジア間の比較研究の相方を求めて東南アジア諸国（シンガポール、マレーシア、タイ）の諸大学における CT 教育の実態について調査研究を行い、とくにチュラロンコン大学（バンコク）との共同研究を準備することができた。

交付額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合　計
2006 年度	1,700,000	0	1,700,000
2007 年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2008 年度	600,000	180,000	780,000
年度			
年度			
総　計	3,400,000	510,000	3,910,000

研究分野：　人文学
科研費の分科、細目：　哲学、哲学・倫理学
キーワード：　哲学原論・各論

１．研究開始当初の背景

わが国でも批判的思考（クリティカル・シンキング：CT）教育の必要性が叫ばれて久しいが、その導入は依然として活発とはいえず、また理論と技術を総合した哲学的実践も未発達である。そこで欧米の CT 教育の現状に学ぶとともに、とりわけ日本語で行われる CT 教育に適した、日常言語の論理に沿った非形式論理学的な議論分析・評価・構築の理論を

求めると同時に、その実践を試行したいと考え、本研究を企画した。

２．研究の目的

議論分析と評価を専らとしたアングロサクソンモデルの CT を乗り越えるために、多様な手法を取り入れた、新しい総合的な CT 教育の理論を探り、それに基づいた教材開発を行い、またそれを応用した CT 教育を大学の一般教育レベルで試行的に実施する。

加えて、アジアの教育風土に適応した CT を模索するために、アジア諸国の諸大学における CT 教育の実態について調査研究を行い、共同研究を準備する。

３．研究の方法

アングロサクソンモデルの CT 教科書を収集し、批判的に研究する。

海外におけるさまざまな CT 教育の実践について調査研究を行う。

CT 教育についての討論と研究の場を提供するとともに、教育-研究者の交流を活性化する。

CT 教育現場のビデオ撮影等を通じて、視聴覚教材の開発を行う。

大阪大学全学共通教育において CT に関する講義とゼミを実施し、成果を還元する。

４．研究成果

〔概要〕

対話的批判的思考 (Dialogical Critical Thinking)、問いの技法 (The Art of Questioning)、子供のための哲学 (Philosophy for Children) ソクラティック・ダイアログ (Socratic Dialogue)、哲学カウンセリング (Philosophical Counseling) などの手法を取り入れた総合的な CT 理論と技術のあり方を探ることができたと同時に、それを応用した CT 教育を試行的に国内外で実践することができた。

加えて、アジアの教育風土に適応した CT 教育のあり方を模索するために、日本-アジア間の比較研究の相方を求めて東南アジア諸国（シンガポール、マレーシア、タイ）の諸大学における CT 教育の実態について調査を行い、とくにチュラロンコン大学（バンコク）との共同研究を準備することができた。

〔研究活動の詳細と成果〕

文献の調査研究

アングロサクソンモデルの CT の現状について文献に基づく調査研究を行った。

文献として、CT の教科書を網羅的に収集し、CT の定義、構成等について傾向を調べた。いくつかの類型に分けることができる。第一に、形式論理学の基礎を中心に据え、議論分析、議論評価、議論の（再）構築の三部分を本体とするもの。これが標準型である。第二に、非形式論理学を中心に心理学的アプローチを加味し、議論を受け入れる際に陥りやすい心理学的誤りを解説するもの。さらに第三に、演繹と帰納の形式的区分を排し、実用的なテクニックを重視するもの。しかし、いずれの類型においても共通しているのは、問題解決 (problem solving) や意思決定 (decision making) を最終目標に据えることである。これがアングロサクソンモデルの CT の最大の特徴であると言えよう。しかし、この地点を越えて行くことがわれわれの課題である。

なお、上の研究に関連して研究協力者（鈴木）の卒業論文（大阪大学文学部、2007 年３月）が一つの成果として結実したことを付記しておきたい。

多様な CT 実践の調査研究

われわれは、これに対して、問題解決や意思決定を最終目標とせず、問いを深め、真の問題の在処を探り、安易な問題解決を求めず、哲学的に、すなわち根本的な意味で批判的に問題を掘り下げるような CT のあり方を探ろうと考えた。

そこで、英語圏以外（とくにフランス語圏）の欧米の国々で CT 教育に関して、どのような実践が行われているかを調査した。

カナダ・ケベック州、モントリオール大学で CT 教育を実践している Marie-France Daniel は、Dialogical Critical Thinking, DCT（対話的批判的思考）の教育を実践している。彼女の教室を訪れ、聞き取り調査を行った。DCT は、デモクラシーの根幹を成す市民の相互理解を、批判的な対話を通して達成しようとするものである。この方法は、大学のみならず初等・中等教育においても用いられ、多文化社会に生きる市民の育成に貢献している。

フランス・パリ近郊に Institut de pratiques philosophiques を設立し、哲学コンサルテーションや問いの技法に関するセミナーを実施している Oscar Brénifier がブルゴーニュの小村で主催する夏期セミナー “The art of questioning” に研究代表者と研究分担者が２回（2007 年７月、2008 年７月）にわたって参加した。問いの技法は、問いを問い直し、問答を通し、問いにおける問題の同定 (identification)・問題化 (problematization)・概念化 (conceptualization) のステップを辿る弁証法的技法である。問題を深化させ、概念の獲得を最終目標に据える、本格的な哲学トレーニングであるといってよい。日常的な問いの中に問題を探るために、どのような問いのトポスを用いるべきか、どのようにして哲学

的知識を援用すべきか、学ぶところが多かった。理論的にというより実践的に技法を体得することが重要である。なお、問いのトポスに関して、レトリックの研究が必要であることが展望されたことは収穫であり、この方面の研究が今後の課題である。

オランダ・ロッテルダム市でソクラティック・ダイアログを実践する哲学カフェや哲学カウンセリングの活動を行っている、研究協力者（Peter Harteloh）を招いて、阪大と京大でソクラティック・ダイアログのセミナーを開催した（2008 年３月）。このセミナーでは、一つの主題をめぐって参加者が合意形成をはかることが目標となる。また、京都市内を散策しながら、ソクラティック・ダイアログを市街を歩きながら行う「哲学的散歩（philosophical walk）」を実践した。なお、哲学的散歩については、来る 2009 年６月末に京都で開催される国際学会（Architecture and Phenomenology, A+P2, 2009 年６月 26 日-28 日，京都精華大学）でロッテルダム市内の City Walk についての発表を研究代表者が Peter Harteloh と共同で行う予定である。

シンガポール、マレーシア、タイで CT 教育の実践がどのように進められているか、調査を実施した。この調査の詳細については、論説「アジア型クリティカル・シンキングの教育モデルを求めて」にまとめたとおりであるが、日本と比べて、これらの国々では CT 教育が組織的に導入、実施されている。国立シンガポール大学（NUS）では University Scholar Program の一環として、マレーシア科学大学では科学リテラシー教育と結んだ形で、またチュラロンコン大学では哲学教育のプログラムの中で CT 教育が行われている。

国際セミナーの開催

ベルギーから研究協力者（Richard Anthone）を講師に招いて、セミナー「思考筋を鍛える」（2008 年 11 月、大阪大学大学教育実践センター）を開催した。このセミナーでは、子供のための哲学（P4C）の紹介やソクラティック・ダイアログの実践が講師によって行われた。また、併せて「哲学的資質（philosophical talent）」についての講演も行われた。なお、これらのセミナーの様子はビデオ録画されたが、編集を経て今後、教材の開発に役立てられる予定である。

CT 教育の実践

タイ、バンコク市のチュラロンコン大学文学部哲学科で研究代表者は、客員教員として教える傍ら、CT 教育に関するセミナーを開催し、講師を務めた（Applying the Art of Questioning to Critical Thinking Education, 15 August 2008）。このセミナーでは、問いの技法を CT 教育に応用する際のポイントを解説すると同時に、ワークショップ形式で出席者にも問答に参加してもらいながら、問題の同定・問題化・概念化のステップを追究した。

なお、チュラロンコン大学では、研究協力者（田中）による CT への傾向性に関する心理学的調査が併せて実施された。この調査に関して、調査結果の研究成果は、来る６月末にマレーシア、クアラルンプールで開催される国際学会（International Conference on Thinking, ICOT, Universiti Putra Malaysia Campus, KL, 21-26 June 2009）で発表（第一著者は田中、研究分担者と共同）の予定である。

また同時に、問いの技法を応用した CT 教育は、大阪大学の共通教育においても研究代表者が担当する講義（クリティカル・シンキング入門）と基礎ゼミ（クリティカル・シンキングの技法）で実践されている。

研究成果の総合

研究成果を理論と実践の両面において、どのように総合し、今後の教育研究活動につなげていくか、が課題である。

理論的には、CT の概念を拡張する必要がある。従来の議論分析・評価・構築に加えて、哲学カウンセリングを含む問いの技法、ソクラティック・ダイアログを含む対話的批判的思考(DCT)の技法、レトリック理論を応用した問いのトポスの探究、さらに概念あるいは思想を表現する名辞と命題のプラグマティックスとその地域性・風土性（意味の地域文化依存性）をも考慮した CT 教育の方法論を確立する必要がある。本研究において、結局、その方法論を確立するには至らなかったが、しかし、以上に見るような知見に到達できたことは、一定の成果であると自己評価する。

実践的には、以上のような方法論に基づく CT 教育を実現するために、教員は学生による CT 学習を巧みにファシリテートすることが重要である。教室で行われる CT の実践は教員と学生の対話にほかならないのであるから、教員がまず DCT の技法を身に付けていなければならない。その際、欧米の学生と違ってアジアの学生は恥ずかしがりで引っ込み思案である点を考慮し、問いの技法を用いた巧みな問いかけ（問答の中で、問いのトポスを自在に変更し、答える相手の思考の志向性を自我への執着から切り離し、他者と共有可能な客観的概念へ向かうよう誘い出すこと）により、学生の自発的思考を促すよう心がけねばならない。研究代表者は、そのようなファシリテーターとしての技法を、夏期セミナーへの参加やワークショップでの講師としての経験などを経て、相当な程度まで習得したと自負している。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計３件）

①荻原　哲、望月太郎（共著）「アジア型クリティカル・シンキングの教育モデルを求めて」（大阪大学、大学教育実践センター紀要、４、2007: 43-52）

②松河秀哉 他（共著）「データマイニングを活用した学習方略フィードバックシステムの開発」（日本教育工学会第20回講演論文集、2006：63-66）

③須藤訓任「習俗の倫理」について――ニーチェの「遠近法主義」の前景と背景――」（大阪大学、大学院文学研究科哲学・哲学史／現代思想文化学『メタフュシカ』36、2006： 1-13）

〔学会発表〕（計１件）

①Taro Mochizuki, L’enseignement de la pensée critique à l’université japonaise, Colloque sur 《Nouvelle Pratique Philosophique》 à l’UNESCO, Maison de l’UNESO, Paris, 15-16 novembre 2006

〔図書〕（計３件）

①篠原資明、須藤訓任他共著『哲学の歴史 12　実存・構造・他者』（執筆部分：「フーコー」581 頁-612 頁）（中央公論新社、2008、総 830 頁）

②須藤訓任、新宮一成、藤野寛、的場昭弘他共著（全 16 名）『哲学の歴史第 9 巻　反哲学と世紀末　19-20 世紀』（中央公論新社、2007、総 750 頁）

③和田秀樹、山本容子、三田誠広、C・Wニコル、須藤訓任共著『自分って何だろう』所収、「子どもだって哲学」（佼成出版、2007：161 頁-200 頁）

〔その他〕（計１件）

①望月太郎，セミナー講師 “Applying the Art of Questioning to Critical Thinking Education”，チュラロンコン大学文学部哲学科、2008 年８月 15 日

６．研究組織

(1)研究代表者
望月　太郎（MOCHIZUKI　TARO）
大阪大学・大学教育実践センター・教授
研究者番号：50239571
(2)研究分担者
須藤　訓任（SUTOU NORIHIDE）
大阪大学・大学院文学研究科・教授
研究者番号：50171278
荻原　哲（OGIHARA SATOSHI）
大阪大学・大学院理学研究科・教授
研究者番号：30169221
松河　秀哉（MATSUKAWA HIDEYA）
大阪大学・大学教育実践センター・助教
研究者番号：50379111

(3)研究協力者
田中優子
日本学術振興会特別研究員（京都大学）
鈴木径一郎
大阪大学文学部卒業生
ピーター・ハーテロー
エラスムス大学教員（オランダ）
リチャード・アントン
カール大帝ユニバーシティカレッジ教員（ベルギー）